



TITLE:

# カウツキーの超帝国主義論

AUTHOR(S):

静田, 均

---

CITATION:

静田, 均. カウツキーの超帝国主義論. 経済論叢 1960, 85(2): 69-81

ISSUE DATE:

1960-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/132738>

RIGHT:

# 經濟論叢

第八十五卷 第二號

---

カウツキーの超帝國主義論……………	静 田 均	1
若きロックの自然法思想(二)……………	平 井 俊 彦	14
アメリカ原子力産業国有化の論理……	金 田 重 喜	31
ふたたび独占資本主義のもとでの剰余 価値の法則について……………	白 杉 庄 一 郎	47
沖縄經濟見聞記……………	堀 江 保 藏	61

---

昭和三十五年二月

京 都 大 學 經 濟 學 會

# カウツキーの超帝國主義論

靜 田 均

## 一

帝國主義にかんする理論史の中で、もしカウツキーに特異な地位が与えられるとすれば、それは彼れの提唱した超帝國主義論によるといっても、あながち誇張に失することはないかもしれない。この超帝國主義論にたいしてレーニンが痛烈な批判をあげたことは、あまりにも有名である。そしてそれはレーニンの帝國主義論の本質的な構成部分をなすといふことは、あきらかに間違ではない。一九二〇年に附せられた『最高の段階としての帝國主義』のフランス版およびドイツ版への序文の中で、レーニンは力をこめて強調している。いわく、『本書においてとくに注意を払っているのは、「カウツキー主義」の批判である』と。いうところのカウツキー主義とは、単にカウツキーだけの個人的見解を意味するのではない。むしろ第二インターナショナルの内部で指導的役割を果たした一連の理論家たち、ならびにそれに同調するひとびとによって代表される國際的思潮を指す。レーニンにとって、かかる思潮は第二インターナショナルの退廃すなわち腐朽過程の産物にすぎなかった。それはマルクス主義の革命的基礎を完全に放棄したことを意味し、帝國主義的諸矛盾の深さとそれから生ずる革命的危機の不可避性を塗りつぶすものであつ

て、徹底的な糺弾にのみあたいたとしか考えられなかった。否、その埋論的誤謬の分析と暴露は、第二インターナショナルと訣別して新たに結成した第三インターナショナルの志気を鼓舞するうえに不可欠の意義をもつと信じたもののごとくである。

カウツキー主義というのは、このように広義に用いられる場合もあるが、本稿ではカウツキーの超帝国主義論をその核心と見做し、それにかんするレーニンの批判を主として『最高の段階としての帝国主義』の中に現れたかぎりで取扱うこととする。換言すれば、同書の第七章から最後の第十章にわたってそこに展開された部分こそが、われわれにとっての問題にほかならぬ。

ともあれ、超帝国主義にかんするレーニンの批判にたいして、当のカウツキーはどのように応酬したであろうか。わたしは寡聞にして、カウツキーの反論なるものを知らない。戦時戦後を通じておそらく黙殺に終ったのではないかとおもう。しかし、それは必ずしもカウツキーが暗々裡にレーニンの批判に屈服したということを語るものでもなさそうである。むしろ最後まで自説をまげなかったと解される節がある。たとえば、晩年の大著『唯物史観』第二卷 (Die materialistische Geschichtsauffassung, II, Bd. 1929 S. 146) を見よ。超帝国主義論の残照が依然として光りを放っているのではないか。しかし、それにもかかわらず、超帝国主義論は、もはや過去の死せる学説として忘却の淵に投ぜられたかの感を抱くものが多い。一つにはレーニンの批判によつて完膚なきまでに論破されたと信じられしているからであり、二つには第一次大戦後の歴史的経過が実践においてそれを覆したと考えられるからであろう。しかし、そこにはなお省察にあたいたする若干の問題点が残っているようにわたしにはおもわれる。

超帝国主義にかんするカウツキーの思想は、第一次大戦のみぎり相ついでノイエ・ツァイト誌上に発表された三

つの論文のうちに展開されている。それは同じことの繰り返しというよりも、むしろ相互補完的な関連をもつものと見ることが出来る。発表の順にしたがって番号を附し、それぞれの論文における主要点をまず明かにしよう。

## 二

第一論文『帝國主義』はノイエ・ツァイトの一九一四年九月一日号に掲載された。この論文は大戦の直前にほぼ脱稿していたのだが、たまたま大戦の勃発に遭遇したため、新たに若干の補足が加えられたといわれている。そしてその部分こそ、超帝國主義にかんする箇所であろうと推定するむきもある。ところでカウツキーによれば、帝國主義は権力の問題であつて、経済的必然性の問題ではない。帝國主義をば、資本主義の生存にとって不可欠のものと見るのは、近時の傾向であるが、それは両者の関係を過大評価するものにはかならぬ。こうした基本的な考え方を前提として、カウツキーはつぎのような問題を提起する。『帝國主義は、いまや資本主義の世界政策の最後の可能な現象形態をなすものであらうか。それとも他の可能な現象形態が存するであらうか』。換言すれば、『帝國主義は資本主義の内部における工業と農業との間の交換取引を拡大するための唯一の可能的な形態でありうるか』。このような問題提起にたいするカウツキーの解答のうち、決定的に重要とおもわれる箇所を左に引用しよう。

引用の一。『われわれは、かつてマルクスが資本主義について述べた言葉、すなわち独占は競争を生み、競争は独占を生むという言葉を、帝國主義についてもいうことができる。大企業、大銀行、大富豪の激烈な競争は、小勢力を併呑した大金融勢力のカルテル思想を生んだ。あたかもそのように、いまや帝國主義列強の世界戦争から最強の国々のあいだの結合が生じ、もつてその競争を終滅せしめることもできる。したがって純経済的立場からすれば、

資本主義がなお一つの新しい段階を体験すること、カルテル政策が対外政策へ移行すること、すなわち超帝國主義なる一段階が生成することが、排除されてはいない。われわれはこの超帝國主義にたいしても、帝國主義にたいすると同様に力強く闘争せねばならぬことは、もちろんだが、その危険は軍備競争のそれや世界平和の脅威に存するのではなくて、他の方面に存するのである』(N. Z. 32 Jahrg. 2 Bd. S. 521 波多野真訳『帝國主義論』創元文庫 昭和二八年三四ページ)。引用の二。『この戦争は帝國主義的傾向と軍備競争とをさしあたり激化させるであらう。……しかしながら、純經濟的に見るならば、このような龐大な負擔が、ついには帝國主義者たちの神聖同盟によつて帝國主義を解消させるということを、もはや阻止する何ものもない。戦争が長びけば長びくほど、戦争が全參戰國を消耗させればさせるほど、そして戦闘が頻発に繰り返されることに尻ごみすればするほど、現在ありそうには思えぬような後者の解決に向つて、われわれはますます近づいて行く』(N. Z. 32 922 前掲邦訳書 三五ページ、傍点は引用者の附したものの)。

以上の引用にかんしては、なお若干の註釈が必要であらう。

第一の引用句の中には、『資本主義がなお一つの新しい段階を体験すること』、『超帝國主義なる一段階が生成すること』等の言葉がある。これらの場合の『段階』(Phase)というのは、資本主義の發展段階というよりは、むしろ政策の發展段階という意味に解すべきであらう。けだしカウツキーは、帝國主義を資本主義の体制そのものと見る見解を排し、あくまで政治活動と見るのであつて、帝國主義とは高度工業資本主義諸國の政策だと主張するのだから、それ以前の政策を現わすマンチェスター主義から区別されると同時に、超帝國主義なるものは、帝國主義のつぎの段階を特徴づける政策であるということにならざるをえない、とわたしは考える。

つぎに第一の引用句においても、第二の引用句においても、『純經濟的立場からすれば』とか、『純經濟的に見れば』とかいう断り書が附してある。この『純經濟的』というのは、どんな意味なのであろうか。おもうにそれは、帝國主義的政策を今後も継続するとすれば、資本主義諸国は經濟的破滅におちいるほかはない。したがって帝國主義にたいする政治的抵抗を予想しないわけにいかないが、かりにそれを除外して經濟的な側面からのみ論理を追求するとした場合というほどの意味に解してよいであらう。『純經濟的に考えるならば』とカウツキーは書いている。『古い資本主義諸国の拡大しつつある工業が、それに対応して農業生産を拡大することができるかぎり、資本主義はさらに發展するであらう。……この限界に達しないかぎり、資本主義はおそらくたかまじたるプロレタリアートの政治的抵抗によつて失敗するかもしれないが、經濟的崩壊によつて破滅に陥るとはかぎらない。これに反してかかる經濟的破産は資本主義が帝國主義の現在の政策をつづけることによって、はやめに招来されるであらう。』(N. Z. S. 921 前掲邦訳書 二二—三三ページ)。すなわち經濟的行づまりを回避するため、帝國主義から超帝國主義へ政策の一大転換をなす公算があるといふのである。

カウツキーは強調する。『世界戦争後において軍備競争の継続にたいする經濟的必然性は存在しないし、また資本家階級の立場そのものからも存在しないのであつて、せいぜい軍備に利害關係をもつ若干のひとつとの立場から存在するにすぎない』(N. Z. S. 920 前掲邦訳書 三一ページ、傍点は引用者)。すなわち帝國主義的政策の主たる推進力は、大ブルジョア、独占資本家、金融資本家ではなく、むしろ軍國主義に利害關係のある少数者にすぎない。『バルカン戦争このかた、軍備競争ならびに植民地拡大の費用がある高さに達し、資本蓄積の急速な続行、それに伴う資本輸出、したがって帝國主義の經濟的基礎そのものを危殆に陥れるにいたつたという重大な現象が生じた(同上)』。

すなわち資本主義はみずから墓穴を掘るの愚に気づけば、政策の一大転換をはかる可能性は、十分に考えられると  
いうのである。

## 三

第二論文『学び直すべき二書』、一九一五年四月九日号から四月三〇日号にかけ四回にわたって連載された。この論文は第一次大戦の勃発を契機として、ドイツ社会民主党の右派に転向したレーンシュおよびクローノーにたいする批判を目的として書かれたものであるが、後半において超帝國主義に言及している。しかしその考察にさきだつて、われわれは若干の予備的叙述を与えねばならない。それは帝國主義の必然性と資本主義の崩壊にかんする彼れの考へである。

カウツキーによれば、帝國主義は不可避免的であり、そのかぎりでは必然的であるという点については異論がない。しかし帝國主義は今後どんな推移をたどるかという点になると、それは将来の問題であり、見通しの問題であるから、絶対的な確信をもつて語りうるものではなく、多かれ少かれ蓋然性をもつて語りうる性質のものである。ところで必然的という言葉には、厳密に区別さるべき異つた二つの意味が含まれている。一つは所与の事情のもとでは不可避的であるという意味であり、他は所与の欲求をみたすに不可欠であるという意味である。この二つの異つた意味は、われわれが行動をなすうゑに問題となるのだが、前の場合は目的を規定し、後の場合は条件を規定するといつてよい。過去における一定の必然的な関連を認識することは、行動をなすために不可欠であり、そうした認識のうゑにたつてこそ、はじめてその原因を取り除くという努力も生れるであらう。



帝國主義の必然性ということは、實際政治の立場からすると、プロレタリアートの存在条件にとって必要であるかどうかという問題に帰着する。カウツキーは、帝國主義的政策は産業を促進するよりも傷つけることが多いという見解にたつ。そのかぎりでは、転換の可能性を考えうるとなす。換言すれば、絶対不変のものとは考えないのだ。

つぎに資本主義の崩壊についていえば、要点は社会主義實現のための前提条件が整っているかどうかという問題に帰着する。カウツキーによると、社会主義の實現のためには客観的条件と主観的条件が必要である。そして客観的条件としては、第一に生産力の十分な發展と経済的集中の一定の高さが要求されるが、この二つとも、すでにある程度まで備っていることは、カウツキーといえどもこれを認めるのである。そこで問題はいきおい主観的条件にかかわるわけだが、これは前者のごとく統計的に捉えうる性質のものではなく、それだけ大きな不確実さを持ちこむ問題たらざるをえない。『いかにすばらしい経済的前提条件であっても、その条件をわがものとし、それを利用しつくす意欲と能力のある人間がいるのでなければ、全然役にたちはしない。プロレタリア階級はこれを遂行することにもつとも活気のある関心をもっているのだが、しかしこの関心をもつという事實は、そのことがプロレタリア階級によつて認識され、プロレタリア階級が国家と社会の中でみずからの立場をば、しかも合目的なやり方で貫徹するうゑに必要な力を獲得しないかぎり、十分なものではない（Z.N.S. 123 前掲邦訳書七二ページ、傍点は原著者）。かくてプロレタリアの数、組織、知性、彼れらの政治的重要性が問題となるが、しかし一定のとき国家や社会で一政党または一階級の意のままになる現実の力は、どのような理論によつてもけつして確められるものではなく、単に行動を通してのみ立証される。理論はただ一定の政党がおそかれはやかれ勝利に導くという傾向を認識せしめうるにすぎず、その時期を確定しうるものではない。

これと関連して重要なのは、階級対立の尖鋭化と資本主義の道德的崩壊の傾向である、とカウツキーは説く。い  
うところの道德的崩壊とは、いったい何か。それは賃金労働者層ばかりでなく、知識人、小市民、小資本家たちま  
でが、支配的な生産様式や経済政策に反対の態度を増大する過程を意味する。彼らの反対が現状を擁護する諸分子  
を弱化させることは、いうまでもない。

実のところカウツキーは、一九〇八年に刊行した『權力への道』(Der Weg zur Macht. 奥田八二訳『權力への道』世  
界大思想全集、社会宗教・科学思想篇一四 昭和三〇年 一六九ページ)の中で資本主義の内部における階級対立の激化と道  
德的崩壊という二つの傾向を指摘し、プロレタリア階級が資本家階級を政治的にも経済的にも収奪して、世界史  
の新時代を開始する可能性のあることを暗示した。換言すれば、資本主義から社会主義への転換がおそれるや  
れ到来するであろうことを世界史の必然の歩みだと説いた。彼は第二論文においても、もちろん従来  
の言論を  
なぐり捨ててゐるわけではない。『発展はともかくこれまでここで述べてきた方面にむかつていつそ  
進展している。しかしそれにも拘らず、その発展はさしあたりなお別なものにもなる可能性ありと評価される一連の現象を示した』(Zusatz 前掲邦訳書 七六ページ)。一連の現象とは何か。それはつぎの五つを指す。(一)イギリスにおける保護貿易の後退、(二)アメリカにおける関税の引下げ、(三)軍備縮少の努力、(四)フランスおよびドイツの資本輸出の急減、(五)金融資本が結ぶさまざまな秘密協定の國際的な絡みあいの増大。

以上のような出来事は、カウツキーによれば、『ナショナルな金融資本相互の闘争の代りに國際的に結びついた金融資本による世界の共同搾取を置きかえた新しい超帝國主義的政策によつて、現在の帝國主義的政策が駆逐されることが可能か否かの検討を促している』(同上)。ここに暗示されている方向は、われわれの言葉におきかえれば、

高度資本主義諸国の國際的競争の時代から國際的提携、國際的協力の時代に轉換するということにほかならぬ。そしてそれは戦争の危機から平和的共存への移行を意味するといつてよい。だが、はたしてそのような期待が実現されるであろうか。カウツキーといえども、さすがに最終的な断案はくだしていない。彼はいう、『それが実現するかどうかを断定するには、なお十分な前提が欠けている』(同上)と。帝国主義は戦後も生きながらえるか、それとも死滅するか。問題は将来にかかるわけであつて、歴史が二つの道のいずれを歩むかは、ひとえに戦争の推移と帰結によつて左右されるであろうというのだ。

カウツキーは書いている、『戦争は金融資本家たちの民族的な憎惡を増大せしめ、軍備競争をさらに押し進め、かくして第二次世界戦争を不可避的なものとするによつて、超帝国主義のひ弱い芽を完全にふみにじることができる。その場合には、……階級対立の尖鋭化と資本主義の道德的崩壊も急速に増大するであろう』。これは『權力への道』の中でカウツキーが主張してきたところのものである。『しかし』、とカウツキーはいう、『戦争は現在のとは別様にも終ることができる。戦争は超帝国主義のひ弱い芽が強められるという仕方でも終結しうるのである。……諸民族の意思の疏通、軍備縮小、平和の永続、——およそこれらのことが生ずるとき、そのときには、戦前に資本主義の道德的崩壊の度を増すにいたつた最悪の原因は、消滅しうることとなる』(Z.N.S. 156 前掲邦訳書七八九ページ)と。はたして、いずれの道をたどるか。決定的なものは、戦争の終結がもたらすであろう。その場合、それはたんに個々の民族の勝利あるいは敗北といったことより以上のものを賭けているのだ。『戦争の後に帝国主義的政策が、いまより以上に進行するとすれば、没落が勝者をも脅かす。また帝国主義がいまの程度にとどまるとすれば、敗者にも負担の軽減があいずをする』(Z.N.S. 146 前掲邦訳書七八九ページ)。結局のところ戦争が終

つてみなければ、どうなるか判らないということなのであつて、もとより予言者の權威をもつて臨んでゐるのではない。彼はむしろ学者のごとき態度で諄々として説得を試みてゐるのである。どつちつかずの控え目な発言であるだけ、慎重とはいへても、同時に日和見主義的な曖昧さに齒がゆさを覚えるものもあろう。カウツキーがいちずに念願したのは、戦争の早期終結と平和の恢復であつた。敗戦という大きな犠牲を賭しても、プロレタリア革命の荊棘の道を歩もうとするレーニンの決意とは、およそかけちがつた態度であつた。戦時中における官憲の圧迫、言論の不自由を計算にいれるとしても、それは彼の所信を本質的にゆがめるものではない。修正主義の抬頭このかた長らく革命主義を高唱しきたつた彼、正統派マルクス主義の理論的大立物として仰がれてきた彼、しかりそうした彼のこのような言行にたいし、憤激をおぼえ、幻滅を感じた者があつたとしても、別に意外とするにはあたらぬかもしれない。事実、彼はさながら傍觀者のような冷徹な態度で、ひたすら戦後の可能性について語つてゐるように見える。

## 四

さてレーニンが『最高の段階としての帝國主義』の中で批判の対象とした超帝國主義論というのは、カウツキーの第一論文と第二論文に現れたかぎりでの超帝國主義論である。ところがカウツキーには超帝國主義に言及したもう一つの論文、すなわち第三論文がある。レーニンが『最高の段階としての帝國主義』の原稿を書いたのは、一九一六年の上半期のことであるから、カウツキーの第三論文は当時まだ発表されていなかった。だから、レーニンがカウツキーの第三論文に触れなかつたのは、当然のことであつて、何の不思議も存しない。しかしわれわれとして

は、カウツキーの第三論文にもいちおう眼を通しておくことが、おそらく無駄ではあるまいとおもう。

さてカウツキーの第三論文は、『帝国主義的戦争』と題し、一九一七年二月九日号から二月一六日号にかけ、二回にわたって連載された(N. Z. 35 Jährig. I Bd 1917)。一九一七年といえは、戦争がはじまつてから足かけ四年目にあたり、また終戦の前年にあたる。この年は世界的に見てまことに文字通り多事多難な年であつた。同年四月、アメリカはついにドイツにむかつて宣戦を布告した。同年同月ドイツでは戦争反対を表明する中間派と左派が、社会民主党を脱退して、新たに独立社会民主党を組織した。そのためにカウツキーは、創刊いらい占めていた『ノイエ・ツァイト』の編集者の地位を追われ、クレーノフが替つてそのあとを襲つた。ロシアではロマノフ王朝が崩壊し、三月革命から十一月革命へと局面はあわただしくも転換し、レーニンのひきいるボルシェヴィキが政権を掌握した。『最高の段階としての帝国主義』がモスコウで出版されたのも、同じ一七年である。一六年から一七年にかけてレーニンは、カウツキーにたいする批判をロシア文の形で数多く発表した。しかし戦時中のことだから、敵対国の間における出版物の交流は中絶の状態であつたに相違なく、レーニンの著書論文はいずれもカウツキーの眼に触れずに終つたものとおもわれる。ともかくもカウツキーの第三論文は、レーニンについて一言も語っていない。この論文は当時左派の代表的理論家であつたラデックにたいする批判を目的として書かれたものである。カウツキーはその中でまたしても超帝国主義に言及しているのだが、その論旨はこうである。

いわく、『資本主義や利潤の努力と同じように、帝国主義もまたその本質上、際限がない。一国の資本家たちは、好んですべての他の国々の資本家を犠牲にして、彼等の超過利潤を高めたがつたり、全世界を独占したがつたりする。世界支配をめざす活動は、帝国主義の本質の中に根ざしている。』『帝国主義はしばしば、ほかのすべての国の

資本家にたいする一国の資本家の戦争を原則として要求するが、めつたにそれを貫くことはできない。大国の帝国主義者たちは、はじめから摩擦が少くないにも拘らず、一国ないしそれ以上の他の大国の帝国主義者たちと折合い、彼等と同盟を結ぶように強いられてきた』(Z. N. S. 482-3 前掲邦訳書 一〇八ページ)。たしかに戦前においても、戦時においても、二つの国家群が相對峙した事實は、何びともこれを認めざるをえない。カウツキーはさらに言葉をつづける。『こうして彼等はすでに、帝国主義の非常に重要な修正への道を歩みだした。彼等の傾向はいろいろの国の帝国主義者の協調を排斥しないこと、また強い力が彼等に直面しているところでは、彼等がこの協調をいたして巧みに遂行しうることを、彼等はそれとともに証明した。双方の陣営の指導的大国の帝国主義者たちが世界の分割と搾取について折合うことで、こんどの戦争が終りをつけることは、けつしてありえないことではない』(Z. N. S. 483 前掲邦訳書 一〇八ページ)。

ここに戦争終結の在り方について、一つの可能性が示されている。決定的な打撃をまだうけていなかった当時のドイツにおいては、勝敗の帰趨はにわかに逆陥を許さぬものがあり、勝利なき戦いとして引分けに終る可能性も、まんざら考えられぬことはなかったかもしれない。しかし、そういう楽天的な考えは、一部少数のひとつとが抱いた希望的観測にすぎなかったであろう。戦争の論理は遙かにきびしく、遙かに非情であつた。それは行くところまで行かずにはやまなかつた。けれども一九一七年ごろにあつては、事態はまだ混沌としていた。カウツキーは相変わらずやや控え目な調子で超帝国主義について書いている。『帝国主義インターナショナルは、世界平和をもたらすかもしれない。のみならず事情によつては、世界平和を確立するかもしれない。けれどもこの場合には、國際的に組織された金融資本を通して世界の搾取は、ますます計画的かつ巨大なものとなるであろう』。しかし、『どうい

ふうにこの戦争が終るかをいま予言することは、絶対にできない。帝国主義者の国際協調は、戦争終結の多数の可能性のうちの一つであるにすぎない。カウツキーはここでも決定的な断案をくだすことに躊躇を示している。彼は淡々たる口調で単なる可能性について暗示を投じているにとどまる、——さながら戦時中の喧騒の圏外に立っている人のように。

おことわり。

紙数の制約のため、本号ではレーニンのカウツキー批判に触れることができなかった。後続の論文において果したいと思っている。